

巨大地震迅速に救援 被災者と信頼育む

「史上最も深刻な災害危機」と国連が発表したスマトラ沖地震（マグニチュード9.1）。

高さ約30メートルの津波が沿岸部を襲い、震源地のスマトラ島・アチェを中心に国内で17万人以上が犠牲となりました。

2004年12月26日午前8時ごろ（現地時間）。日曜日で静かな街は一転して大惨事となったのです。スリランカやインド、タイなど周辺の14カ国も被害を受け、最終的には30万人近くが死亡・行方不明となりました。

世界各国から緊急救援チームが被災地に向かう中、アチェに最初に到着したNGOがAMDAでした。震災から2日後の28日、インドネシア支部の医師と岡山市の本部から派遣された調整員が現地入りしました。

2人が目にしたのは、一帯が倒壊した家屋とがれきの山でした。助けを求める

生存者の叫び声があちこちで聞こえ、まるで「希望を失った死の街」のよう



スマトラ沖地震で崩壊したアチェの街で悲しみに暮れる市民

だったと振り返っています。

救援活動が行われた4カ月間、AMDAはカナダやネパールなど6カ国の協力を得て医師ら63人を派遣。患者1万3千人に医療サービスを提供しました。この異なる国々のスタッフとの共同作業により、負担を分かち合い迅速な救援活動を行うことができました。AMDAグループの菅波茂代表が考案した「多国籍医師団」（1993年発足）の底力を再認識しました。

この地震を皮切りに、インドネシアは約一年半余の間に4回の大地震に見舞われました。マグニチュード8.7の北スマトラ・ニアス島地震（2005年3月）、57秒間にわたって揺れが続いたジョグジャカルタ地震（06年5月）、高さ2メートルの津波が発生した西ジャワ州パンガンダラ地震（06年7月）です。

地震が頻繁に起きるのには、地質学的

な問題があります。国土の真下に「死の断層線」と呼ばれ、世界で最も長い環太平洋火山帯が通っており、自然災害に非常に脆弱なのです。活火山も200以上を数えます。

住民の生活はほぼ平常に戻っていますが、津波のトラウマを今も引きずっている人がいるのも事実です。しかし、安全な地へ引越す人はほとんどいません。先祖から何代も住み続けた地域に愛着があるからです。信仰心も厚く、神の教えや自然の結果を運命として受け入れる国民性も影響しています。

AMDAの理念は「困った時はお互いさま」という「相互扶助」の精神です。救援チームと被災者の間で友情や信頼が育まれていきます。国境を越えた「多様な性の共存」が生まれるのです。平常時も、この輪が広がることを心から願っています。

インドネシア 東南アジアの南部に位置し、首都はジャカルタ。赤道にまたがる1万3466の島で構成され、人口2億5500万人の世界最大の群島国家。面積は189万平方キロで日本の約5倍。イスラム教徒が全体の87%を占め、世界最大のイスラム人口国としても知られる。AMDAインドネシア支部は1992年、スラウェシ島マカッサル市に開設。スタッフは75人。

